

特集
伝承
～志を次世代に～

Special Features
Tradition
Passing aspirations on to the next generation

まとめ
Conclusion

志を伝える方策

～魂を伝える技能伝承のあり方～

森 和夫

MORI Kazuo

株式会社 技術・技能教育研究所



1—熟練を伝える

熟練はその道を極めれば極めるほどに神がかって見えるようだ。「神の業」といわれる由縁である。それには理由がある。有り得ない事を瞬時に処理してしまうとか、手加工では不可能とされる精度を見事に達成してしまうなどはその一端である。何故それが出来るのだろうか。それは熟練者が作業概念と呼ばれるものによって保持しているからだ。手業や感性はこれについてくることになる。作業概念は言葉では説明しづらいしろものだ。暗黙知を明確にすることで伝承がしやすくなる。

私はこれまでに技能伝承マニュアルを用いたり、重要な感覚を抽出したり、典型課題と呼ぶ重要な体験を組織することで伝承活動をスムーズに展開するよう提案してきた。当然ながら、暗黙知の形式知化をも推進してきた。いわば、暗黙知を形式知に置き換える方法を提案してきたのである。暗黙知は技能に限らず、技術や知識に至るまでにも広がる一方、ものづくりばかりで無く、サ

ービス労働、事務・管理労働にも及ぶ。しかし、単に形式知、暗黙知を伝えることだけでは完成度の高い技能伝承が行えるとは言えない。そこには志の伝承が入っていないからである。

技能伝承の究極のテーマは熟練者の魂を伝えることであろう。これまで、技能伝承にかかわる内容を多く扱ってきたが、この分野に関しては相変わらず古典的なことしか論じられていない。例えば、「ベテランと寝食を共にしてわかる」「親方から生活を通じて全てを学ぶようにしなければ身につかない」「厳しく躰けて、はじめて魂が伝わる」ようなことである。これでは全く現代的ではない。ここではもっと踏み込んだ方法論を展開してみたい。「志」とは「心の持ち方、信念」のことだ。職人やベテランたちが持つ志の内容とは具体的にはどのようなものだろうか。それを追求することで方法論が明確になってくる。



■写真1—フライス刃物に刷毛で油を付けながら回転の様子で煙の上がり具合を観察する



■写真2—指の腹で金属表面の仕上がりを確認し、引っ掛かりがないかを確認する

2—職人仕事の特徴

私は熟練職人たちと対談したり、インタビューする機会に恵まれた。もちろん、巷の書物にもそれらのものはある。例えば、『職人衆昔話』(文芸春秋社刊)はその代表的なものである。関心のある方はぜひ手にしたい図書だ。これらに共通する仕事のやり方の特徴を整理し、心の持ち方、信念を探ることにしよう。

一般的に職人はユーザーの意向や希望などを取り入れて作業に入る。ユーザーに合わせた製作が原則である。職人は全工程にかかわる仕事をする。仮に、一部分で終わる仕事であっても、全工程を視野に置きながら仕事をする。また、段取りの良し悪しが仕事の成否を決定付けることを知っている。段取りは仕事の全体をつかんでいないと的確に実行できない。仕事の全体像が見えて適切な判断を行っているのだ。職人は仕事に精通し、実践への展開力がある。理屈でわからないことも、やってしまう。そのような場面もアイデアや創意工夫で乗り切っていく姿勢と実行力がある。その行動は一見、何気ない動作や方法に見えるが、道理にかなったものである場合が多い。「経験を蓄積して知に結実する」のである。

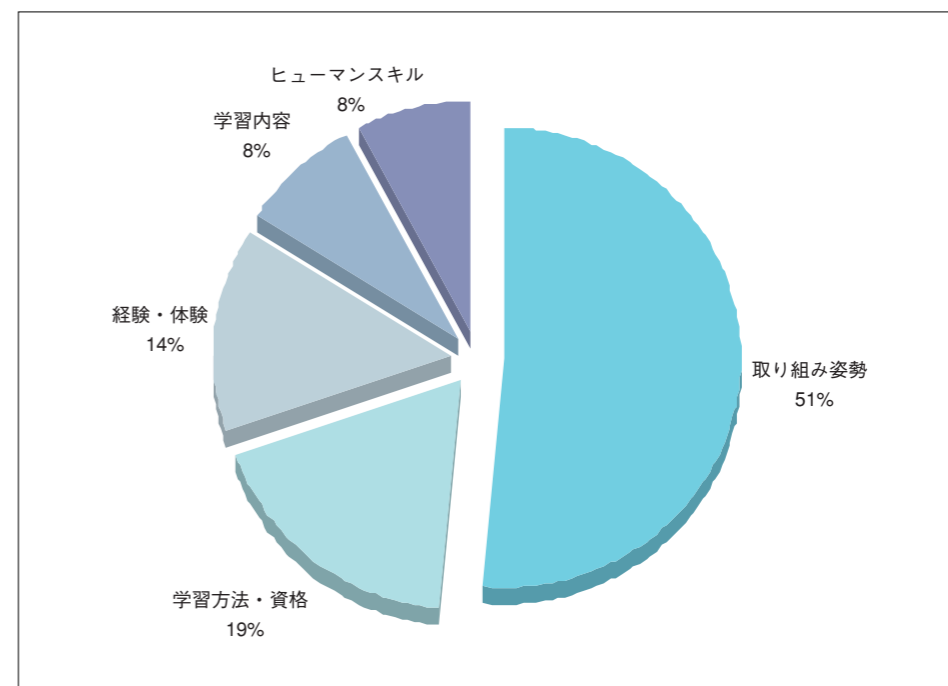
また、職人は物事の本質をとらえる目を持っている。さまざまなケースに対応しながら仕事をしていると、それらを束ねている物事の本質に気づくのである。技術者が分析的に客観的に捉える作業をしている間に、早く確実に対応できてしまうものだ。仕事の仕方の何が問

題で、どう手を打てばいいかがわかる。個別性の高い作業に数多く従事すると、目的とする生産と、置かれている状況把握を関連付けて最適・最短の方法で実行するようになるようだ。

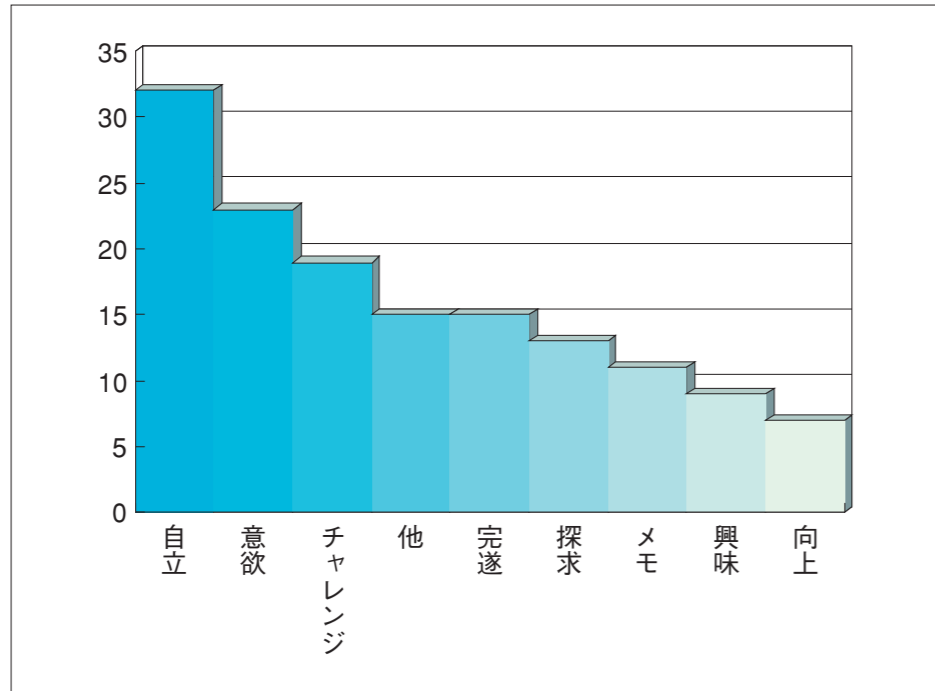
職人は無理・無駄・ムラのない仕事をする。無理なことはしないし、無駄もしない。無駄は最も嫌うものだ。さらに、自然から生まれたものは自然に帰すという心がある。必要以上の殺生もしないし、必要なものを必要なだけ使って製作する。環境の保全、生態系を壊さない生活の仕方と言うものを実践している。

このように見てくると、職人は文化を保有することで一貫性のある行動がとれるようになると考えられる。職人の文化は仕事中心の志向、高い品質志向が根底にある。これは「職人の良心」「職人の心意気」の結果として表わされる。これは「こだわり」や「独創」を生み出すのだ。ものの道理や自然の流れに謙虚である。自らを自然と同化させ、自然への回帰を図る。エコロジカルな仕事、そして本質把握につながる。顧客中心、経験中心、実質中心の考え方が基本にある。これは形式主義やタメエをひどく嫌うのである。つまり、職人は仕事を通して世にある本質への回帰を果たしていると言えよう。

方法論にひきつけてまとめてみると、本物志向、美(完成度の高さ)、良いものに触れることで学習が可能だ。多角的なものの見方考え方がなければこのような状態は学び取ることはできないだろう。自然界にあるさまざまな事象、現象に体を置いてそれから感じ取ることが大事に



■図1—保全技能者の成長に重要なこと(N=281)



■図2 保全技能者の取り組み姿勢の内容 (N=144, 単位: 件)

なる。伝承者としてはこのような機会をいかに効果的にセットできるかが重要になる。

職人について具体的に考えてきたが、技術者や研究者においても同様のことを見出すことができる。また、職人仕事はこれらの全ての特徴を備えているわけではなく、幾つかの内容を見出すに過ぎないことも書き留めておかなければならない。

3—技能者として成長する契機

自動車製造工場の機械設備の保全技能者に対して調査をしたことがあった。技能者として成長するにはどのような機会や体験が重要なのかという問いである。「あなたの仕事歴・学習歴を概観して、何を心がけたり、どんな機会が自分を作る上で大事でしょうか」と尋ねてみた。その結果、「経験・体験」「学習内容」「学習方法・資格」「取り組み姿勢」「ヒューマンスキル」の5分類に整理できた。図1はこの出現頻度を表している。最も多い内容は「取り組み姿勢」であった。続いて「学習方法・資格」「経験・体験」が続く。このように保全技能者の形成にとって本人の姿勢や学習の仕方が大きな要素となることを意味している。

取り組み姿勢の内容を詳細に見たものが図2である。図によれば、保全技能者にとって、最も重要な姿勢は「自立」の姿勢であるといえる。具体的には「自ら判断し、行動すること」や「自己完結的な仕事の仕方」「他人まかせにしない」といった姿勢が必要であるとしている。技

能者に自己完結性を求めている。

意欲は「積極的に行動すること」や「体を動かして学ぶ、解決する」「努力・やる気」「前向き」の姿勢をさしている。チャレンジは「間違いを恐れない」や「いやなものへも取り組む」「結果を出す」「上のレベルへ挑戦する」の姿勢を挙げている。完遂では「独りでやり遂げる」や「わかるまで調べる」「自分なりにやり遂げる」「最後まであきらめない」などが記述されている。探求は「理解する」や「調べる」「追求する」「疑問を持つ」「研究する」が記述されている。問題解決は、探求心が求められると共に1つのテーマを追い続ける姿勢を挙げている。メモをとる姿勢は忘れるのを防ぐためや、事例研究資料として保存するためも含んでいる。問題整理のため、覚えるため、同じ過ちを繰り返さないため、仕事の手順を記述するためである。興味をもつ姿勢は知的好奇心を持つことを示している。多分野に興味をもつことと保全に興味を持つことの2つに分けられた。向上の姿勢は、保全への取り組み方の向上を意味している場合と、他の技術・技能者や同僚との人間関係の向上、設備を改良改善することの3つの方向があった。

4—志を伝承するには

後継者を育てるにはどのようにすればよいだろうか。志を伝承するには「技」の伝承と異なって、ある配慮が必要だろう。第1は継承者が主体的に関わることである。これは自らがその意味・意義を熟知してその志

に関わることだ。第2にそれは自律的で無ければならない。人から言われて行うのではなく、自らが自らの方法・考えに従って行うことである。他律的な学習ではその成果が限定されると言うことに他ならない。第3に継承者が行う取り組みへのドライブは達成感・価値意識によって意識付けられることであろう。何かの評価が他者からされて、行われるような評価ではなく、自分の価値基準に照らし合わせて納得が行くかどうかということに関わるものだ。

図3は志の伝承機会の設定について図式化したものである。図の左側が伝承者(指導者)、右側が継承者(学習者)を表している。伝承者は機会設定にどの程度関わるかで3レベルを設定している。伝承者主導、継承者主導とその中間である。学習の初期の頃は伝承者主導で機会設定を進める。学習が進展して中間期にさしかかると継承者の機会設定を考えさせて助けるのである。そして学習の後期には継承者主導で機会設定を行う。このように継承者が自らの学習を作り上げるように仕向けることで効果的に進行できる。このように継承者の育ち方、到達水準に合わせて伝承の方法を組織するとよい。志の伝承は「技」の伝承とは異なることが理解できよう。

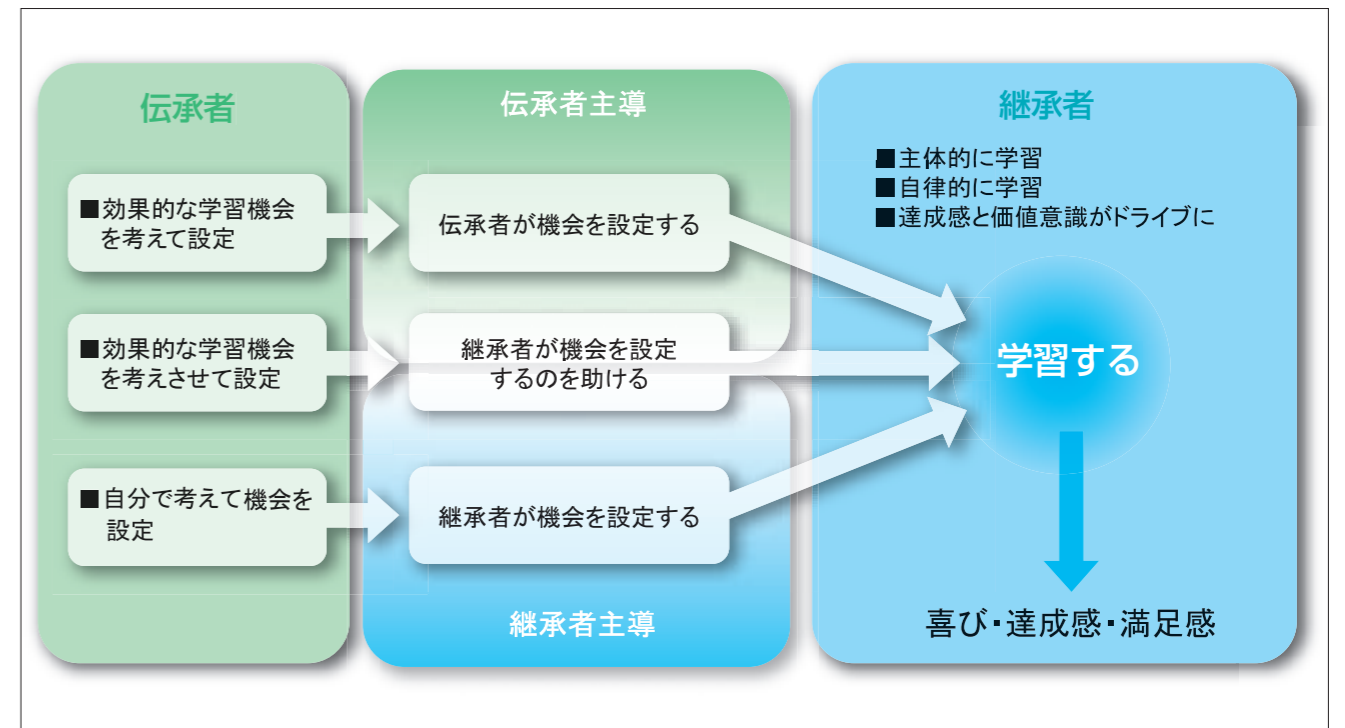
伝承者は自らの熟練形成と志の確立の軌跡を考え、その技能にとって何が重要な契機になっていたかを振り返りながら、必要な学習テーマを選定しておかなければ

ならない。この際、本稿で述べてきた職人仕事の特徴は参考になるだろう。このような志の伝承にとって重要なことは伝承者のレベルである。その水準がさほど高くない場合には、継承者の育ち方は遅くなるが予想できる。従って、継承者自らも研鑽に勤め、より高い水準の技能者へと脱皮を図ることも必要になる。

このような機会設定を行いつつ、技の継承活動を連動させて進めることがよい。志は技を離れては無く、技と共に志はある。技を磨きつつ、志は確かなものとして後継者に移転できる。個々の技が確立してくると志の伝承スピードは急速に高まると予想される。伝承者は常に一定の距離から継承者を評価し、その進展にあわせて適切な指導を展開しなければならない。伝承活動の後期になると伝承者の意図と離れて動き始めるが、これは当然のこととして受け止めたい。なぜなら、継承者は伝承者の次代を担う熟練職人としての土台を築く大事な時期だからである。大局的な視点から見守る心意気が必要になる。次代を築くために、志の継承についても創造的、創作的に活動していただきたい。

<参考文献>

- 1) 森 和夫:『保全技能者の職業能力と教育訓練の課題』指導学科報告シリーズ第14号、職業能力開発大学校指導学科、2000年3月
- 2) 森 和夫:『職人に学ぶ一技の伝承と文化—』高等教育情報推進協議会、2000年11月
- 3) 森 和夫:『技の学び方・教え方』JAVADA選書、中央職業能力開発協会、2002年3月
- 4) 森 和夫:『技術・技能伝承ハンドブック』株式会社JIPMソリューション、2005年5月



■図3 志の継承機会の設定